現代方言に継承されている《醒世姻緣傳》中の複音節形容詞 (1)

The Adjective of 《*Xingshi Yinyuan Zhuan*》
Remaining in Modern Dialect Chinese. 〔Part I〕

植　田　　均
Ueda, Hitoshi

1. AA型形容詞
2. ABB型形容詞 (以上、本稿)
3. その他の複音節形容詞 (以下、別稿)

1. AA型形容詞

単音節形容詞の重畳型である。重畳型は単音節語よりも意味が強調される。

暴暴　bàobào

釈義:「〔形〕突き出た」。現代共通語では一般に“突出;鼓起”。

《现汉》、《古今》、《漢語》、《补》に未収。(但し、“暴”一字では釈義“突出、鼓起”で共通語でも用いる)。《拼音词汇》にも“暴暴”は未収。

方言辞典類では《汉方常》、《山东》、《现代北京》、《河北方言》に未収。

《汉方大》(p.7103) に“暴暴”の釈義“突出、鼓起”の方言点を冀魯官話とする。

《現漢方大》(p.5439) に“暴暴”の釈義“剛剛開始;起初。(2) 忽然”(方言点は揚州) は異なる。但し、“暴暴哩”(釈義“形容牙齒向外突出 (含貶義)”の方言点を萍鄉とする。

近世語辞典類では《例释》に“暴暴”(釈義“突出;鼓鼓”) で《醒》第四十九回より挙例。《百部小说》も収録。

《红楼梦语言词典》に“暴”(釈義“凸出”) を収録。なお重畳語“暴暴”は未収。

《方言俗语》、《古方言》、《金瓶梅詞話》、《兒女英雄傳》に未収。

《醒》では同義語“凸暴”、“突出”、“突暴”も用いるが、“暴暴”も用いる。「突き出る」対象は“眼”である。“暴暴”の例。

一個媒婆老張領了一個媳婦子來，年紀有二十多歲，黄白淨兒，暴暴的兩個眼，模樣也不醜，只是帶着一段凶相，…。(49.7a.3)

（とりもち女の老張は、あるかみさんを連れて来た。年の頃は二十歳余りで色が白く、突き出た目だが、別に不格好ではない。ただ、少し凶相を帶びている。…。）

《石頭記》からの例。単字“暴”で用いるのは共通語の用法である。

林黛玉…笑道：“…。這有什麼的。筋都暴起來，急的一臉汗。”（《石頭》32.5a.4）

（林黛玉は…笑って「…。こんな何でもないことに青筋をたてて。顔中汗だらけですわよ。」と言った）

餒餒 něiněi

釈義：「〔形〕怖がっているさま、おびえている」。現代共通語では一般に“惧怕的样子；胆怯的样子”。

方言辞典類では《汉方常》、《山东》、《现代北京》、《現漢方大》(p.5525) に“餒餒”は未収。

《汉方大》(p.4986) に釈義“惧怕的样子”の方言点を冀魯官話（山東省）とする。

近世語辞典類では《例释》に“馁馁”（釈義“惧怕的样子”）を《醒》第九十五回より挙例。《百部小说》にも収録。《方言俗语》、《古方言》、《金瓶梅詞話》、《石頭記》、《兒女英雄傳》に未収。

《醒》の例。

你因甚麼見了他便有些餒餒的。别說他不過是一個少眼沒鼻子的東西，他就是條活龍，也不過是一個。(95.2a.2)

（どうしてあの人を見ておびえているのですか？あの人は目が一つ欠け、鼻がない代物にすぎないのです。それに、あの人がたとえ活きた龍であってもたかが一人なのですよ）

滲滲 shènshèn

釈義：「〔形〕ひどく怖がっている、ひどくおびえている」。現代共通語では一般に“很怕；很可怕”。

《现汉》、《古今》、《补》に未収。《漢語》に釈義“寒冷之狀”で《元曲選》より挙例。

方言辞典類では《汉方常》、《山东》、《现代北京》、《河北方言》に未収。

《汉方大》(p.5777) に“滲滲”（釈義“很可怕”）の方言点を冀魯官話（山東省）とし、《醒》第四十五回より挙例。

《現漢方大》(p.5278) に“滲滲”は未収。

近世語辞典類では《例释》に釈義“很滲”で《酸》第四十五回より挙例。この按語に“今方言中还说‘生生’”とする。《百部小说》にも収録。

《方言俗语》、《古方言》、《金瓶梅詞話》、《石頭記》、《兒女英雄傳》に未収。

《醒》では類義語“可怕”、“怕”を多く用いるが、時に“滲滲”も用いる。黄肅秋注に“滲滲的”を釈義“冷水激人皮肤起栗叫滲，引申为遇到突然恐怖时皮肤起栗，也叫滲滲的，意谓怪怕人的。《水浒》魯智深剃度后的脸滲人可怕，与此同义”とする。その例。

他說：“我不知怎麼，只見了他，身上滲滲的。”(45.1a.10)

（彼は「僕はどういう訳か分からないけれどもあの子を見れば体がぞっとするのです。」と言った）

梭梭 suōsuō

釈義:「〔形〕筋肉がぴくぴくと動くさま」。現代共通語では一般に“肌肉连续跳动; 突突颤动”。

《现汉》、《古今》、《补》に未収。《漢語》に“謂往復如梭, 如‘兩眼梭梭跳, 必定晦氣到’, 见《元曲選》”とする。《拼音词汇》に未収。

《汉方大》(p.5266)に釈義“肌肉连续跳动的样子”の方言点を冀魯官話(山東省)とし、《醒》第六十回より挙例。

《現漢方大》(p.3662)の“梭梭”は釈義が異なる(釈義“(1) 嗎啡的俗稱。(2) 後綴, 用在形容詞後”、“灌木或喬木”)。

近世語辞典類では《例释》に“梭梭”(釈義“肌肉连续跳动的感觉”)を《醒》第六十回より挙例。《真本金瓶梅》では同義語“捘捘”とする。《百部小说》にも“捘捘”を収録。

《方言俗语》、《古方言》、《石頭記》、《兒女英雄傳》に未収。

《醒》の例。

恰好這一日身上的肉不跳, 止那右眼梭梭的跳得有二指高;他心裏害怕, 說道:“…。”(60.10a.4)

(丁度その日は、体の肉はぴくぴく動かなかったが、ただ右目の筋肉が人差し指ほどの高さまでぴくぴく動いた。彼は心の中で怖くなり、言った「…。」)

《金瓶梅詞話》からの例。“梭”〔suō〕と“捘”〔zùn〕は同音語ではない。しかし、木偏と手偏では字形が酷似しているから用いられたと思われる。

腰肢兒漸漸大, 肚腹中捘捘跳, 茶飯兒怕待吃。(《金瓶》85.1a.11)

(腰の辺りが徐々に大きくなり、お腹の中はぴくぴく動いて、食事もとりたくないの)

挣挣 zhēngzhēng (怔怔;睁睁)

釈義「〔形〕ぼんやりしたさま、ぽかんとしたさま、唖然としたさま。」現代共通語では一般に“呆呆”。また、現代規範化文字では一般に“怔怔”と作る。

《现汉》、《古今》、《漢語》、《补》に未収。《拼音词汇》に未収。

方言辞典類では《汉方常》に去声で北方方言、釈義を“同‘怔怔’, 发楞的样子”とする。

《山东》、《现代北京》、《河北方言》に未収。《現漢方大》(p.2542)に“挣挣”, は未収。また、“怔”字自体が未収。

《汉方大》(p.4029)に“挣挣”(釈義“呆呆”)の方言点を冀魯官話(山東省)とする。なお、同書(p.3584)の“怔”項に“怔怔”は未収。

近世語辞典類では《例释》に“挣挣”(釈義“呆呆”)で《醒》第五十八回、八十回より挙例。更に同音語“睁睁”とも作り《真本金瓶梅》より挙例。

《百部小说》、《方言俗语》、《石頭記》、《兒女英雄傳》に未収。

《醒》では同義語“呆呆的”も多く使用するが、“挣挣的”はそれ以上に多く使用。なお、“怔怔的”は未検出。“挣挣的”の例。

晁梁還挣挣的脫衣裳, 摘網子, 要上炕哩。(49.2b.7)

(晁梁はなおぼんやりしながら着物を脱ぎ、髪の網を取り、オンドルに上ろうとしています)

小玉蘭回家, 把前後的話通長學了, 給了素姐一个閉气。挣挣的待了半會子, 罵道:“…。.”(60.7b.3)

（小玉蘭は家へ戻り、後先の事を全て素姐に伝えた。息が詰まったような感じで暫くの間、ぼんやりしていたが、罵って「…。」と言います）

把个剃頭的罵的挣挣的說："…。"（64.1b.10）

（床屋は罵られ唖然としていたが、「…。」と言い返します）

相大妗子沒理他，拉着往外去訖。氣的个素姐挣挣的，一聲也沒言語。（60.13b.10）

（相伯母さんは彼女に構わず引っ張って外へ出た。素姐は怒りの余りぽかんとして一声もない）

《金瓶梅詞話》からの例。同音語"睁睁"と作る。

那小玉真個拏錫盆舀了水，與他洗了手。吳銀兒衆人都看他睁睁的，不敢言語。（32.4a.2）

（小玉は本当に錫の鉢に水を汲んで来て彼女に手を洗わせます。呉銀児達はぽかんとして、一声もありません）

把這申二姐罵的睁睁的，敢怒而不敢言。（75.11a.10）

（申二姐は罵られ、<怒りで>ぽかんとしていますが、怒りがあっても声には出せません）

《石頭記》からの例。同音語"怔怔"と作る。

恰正是晴雯說這話之時，他怔怔的只當是晴雯打了他一下。（《石頭》73.2b.4）

（丁度、晴雯がこの言葉を発した時、その子はぼんやりとして晴雯が自分をぶったのだと思いこんだのです）

住住 zhùzhù

釈義：「［形］①ぴったりしている、隙間がない。②きついさま、強いさま、しっかりしている、確かなさま」。現代共通語では一般に"①严严。②牢牢；死死"。

《现汉》、《古今》、《漢語》、《补》いずれにも未収。《拼音词汇》に未収。

方言辞典類では《山东方言研究》に"住住的"を釈義"程度副词，牢牢的，结结实实的，完全的"とし、上記釈義①と②に分けない。ここの用例は下記第六十回、六十八回と同一である。

《汉方常》、《山东》、《现代北京》、《河北方言》、《現漢方大》（p.1837）に"住住"は未収。

《汉方大》（p.2752）は上記釈義①、②ともに方言点を冀魯官話（山東省）とする。

近世語辞典類では《例释》に上記釈義①、②に分けて《醒》より挙例。

《古方言》、《方言俗语》、《金瓶梅詞話》、《石頭記》、《兒女英雄傳》に未収。

上記釈義①の場合。《醒》では同義語"嚴嚴的"も用いるが、時に"住住的"も用いる。その例。

素姐怒道："…。他怕我使了他的家當，格住你不叫見我，難爲俺那賊强人殺的也寧成一股子，瞞得我住住的，不叫我知道。…。"（68.5b.6）（"寧成"＝"擰成"）

（素姐は怒って「…。あいつは、私が家のお金を使うのを心配して私をあなた方に会わせないのです。私のあの死に損いも一緒になって私を漏れることなく騙し、私に教えないんだ！…。」と申します）

上記釈義②の場合。《醒》において同義語"牢牢的"は極めて優勢。時に"住住的"も用いる。その例。

狄希陳這一夜雖比不得那當真得柙床，在這根窄凳上綑得住住的，也甚是苦楚了一夜。（60.12a.2）

（狄希陳はその夜、本当の檻寝台とは比較にならないですが、狭い腰掛けにぐるぐる巻きに縛られ、とても苦しいものでした）

2. ABB型形容詞

「中心語（A）+付加語（BB）」の重畳型形容詞である。中心語が主要意義を示し、付加語は強い意義を示さない。

急巴巴　jíbābā

釈義：「[形]慌てているさま、慌てている」。現代共通語では一般に“急忙；焦急的样子”。

《现汉》（釈義“急迫的样子”）、《漢語》（釈義“急迫貌”。見《元曲選》）に一般語語彙で収録。《古今》、《补》に未収。《拼音词汇》にも未収。

方言辞典類では《汉方常》、《山东》、《现代北京》、《河北方言》、《現漢方大》に未収。

《汉方大》（p.4324）に釈義“焦急的样子”の方言点を東北官話（吉林省）、冀魯官話（河北省中部、山東省）とする。

《現漢方大》（p.2839）に“急巴巴”は未収。但し、“急巴巴的”（釈義“急迫的样子”）の方言点を洛陽とする。

近世語辞典類では《例释》に釈義“急忙。巴巴，词尾，无意”で《醒》第十五回より挙例。《方言俗語》は“急波波”で立項し、“急巴巴”と同じだとする。

《古方言》、《百部小说》、《石頭記》、《兒女英雄傳》に未収。

《醒》の例。

二人急巴巴收拾不迭，行李止粧了个褥套，别様用不着的衣裳也都丢下了。（15.8a.5）（“粧了”＝“装了”）

（二人は慌てて準備にとりかかりました。荷物は単にフトンを詰めこんだだけで、他の取り急ぎ使わない着物は全て置いておきました）

《金瓶梅詞話》からの例。“急波波”と作る。

又差琴童去請劉婆子的來，劉婆急波波的一步高一步低走來。（《金瓶》53.12b.5）

（また琴童を使わして劉婆に来て貰います。劉婆は慌ただしく一歩一歩よろよろとやって来ました）

惱巴巴　nǎobābā

釈義：「[形]悩んでいる」。現代共通語では一般に“恼怒”。

《现汉》、《古今》、《补》に未収。《漢語》に釈義“惱貌”、一般語語彙で《醒》より挙例。《拼音词汇》に未収。

方言辞典類では《汉方常》、《山东》、《现代北京》、《現漢方大》（p.4536）に“惱巴巴”は未収。

《汉方大》（p.4360）に“恼巴巴”（釈義“恼怒（贬）”）の方言点を冀魯官話（山東省）とする。

近世語辞典類では《例释》に釈義“恼怒。含有贬义。巴巴，词尾”とし、《醒》第二回、九十五回より挙例。《古方言》に収録。

《百部小说》、《方言俗语》、《金瓶梅詞話》、《石頭記》、《兒女英雄傳》に未収。

《醒》の例。

珍哥也就沒趣了許多，問道：“你回來路上歡歡喜喜的，你如何便惱巴巴起來。…。”（2.1b.1）

（珍哥は随分興ざめして「あんたは戻ってくる時喜々としていたのに、どうして急に悩み出したの？」と尋

ねます)

已將日落時節, 素姐惱巴巴不曾吃飯。(95.11a.6) ("已將" = " 已將")

(既に日が暮れる頃ですが、素姐は悩みのあまり、ご飯を食べていません)

窄鱉鱉 zhǎibiēbiē (窄逼逼)

釈義:「〔形〕狭い」。現代共通語では一般に"狭窄"。貶義である。

《现汉》、《古今》に未収。《漢語》に"窄鱉鱉"(釈義"狭窄貌")を《醒》より挙例。《补》、《古今》に軽声語"窄憋"〔zhǎibie〕(釈義"(1) 窄小;不寛敞。(2) (心胸) 不舒暢。(3) (生活) 不寛裕)を方言語彙とする。《拼音词汇》に未収。

方言辞典類では《汉方常》に同音語"窄憋"(窄別)(釈義"狭窄;窄小")と作り、北京、天津等地方言とする。なお、"窄憋憋"は未収。《北京话》、《现代北京》にも"窄憋"(窄別)と作る。《山东》、《河北方言》、《吴》に未収。

《基本词汇集》(p.4410) の詞目"窄"項で"窄憋"または"窄鱉鱉"を指す方言点は無い。ほとんど全ての方言点で"窄"を用いる。一方、"狭"を用いるのは僅かに歙県、南通の二点のみである。

《汉方大》(p.5167) に"窄鱉鱉"(釈義"很狭小")の方言点を冀魯官話 (山東省) とする。

《汉方词》の詞目"窄"項で"窄憋"または"窄鱉鱉"を指す方言点は無い。"窄"の項は"窄"を用いる (概ね北方) 区域と"狭"を用いる (概ね南方) 区域に大別されるようである。

《現漢方大》(p.3446) に"窄鱉鱉"自体が未収。但し、"窄憋憋"の釈義"(1) 窄小;不寛敞。(2) (心胸) 不舒暢"(方言点哈爾濱)、釈義"(1) 形容室内又窄又小, 使人難受。(2) 形容經濟拮據"(方言点忻州) とする。

近世語辞典類では《例释》に"窄偪偪"(釈義"很窄狭。含有貶义。偪偪, 词尾) で《醒》第七回より挙例。また、"窄逼逼"と作り《醒》第七十五回より挙例。この按語に"今方言中"窄"读zhei, 阳平音"とする。

《古方言》に"窄窄別別"(側撇撇、窄鱉鱉、窄逼逼) で立項する。

《方言俗语》、《金瓶梅詞話》、《石頭記》に未収。

《醒》の"窄鱉鱉"、"窄逼逼"は"窄憋"のABB式重畳型であると思われる。その例。

他說:"窄鱉鱉的去處, 看咱哥合嫂子聽見, 悄悄的睡罷"。(28.2b.7)

(彼は「狭い所だから兄夫婦に聞こえるよ。静かに寝よう。」と言った)

你那官衙裏頭窄鱉鱉的, 一定不是合那聽裏鄰着, 逐日炒炒鬧鬧, …。(84.2b.8)

(役所の公邸は狭苦しい所で、きっと裁判官の長官か、そうでなければ地方府長官と隣り合わせだから、毎日ギャーギャー、ドタバタと騒がしければ、…)

看是甚麼顯宦哩麼, 住着个窄鱉鱉的首領衙裏, 叫你腰還伸不開哩。(85.12a.8)

(どんな高位の官になるのですか。狭苦しい首領公邸に住んで、腰を伸ばそうとしてもできませんよ)

同音語"窄偪偪"、"窄別別"の例。

晁住又甚是打攔頭雷, …又對晁大舍道:"衙內窄偪偪的个去處, 添上這們些人, 怎麼住的開。…。"(7.6a.3)

(晁住は甚だ急な出来事が起こり、…また、晁大舎に「役所内の官舎は狭苦しい所ですから、こんな人達を加えて、どうやって住めるんですか?…。」と申します)

住着窄别别的點房子，下了茶來也沒處盛；衣裳首飾陸續隨時製辦，也不在這一時，只叫他做…。(75.14a.2)

(私達は狭苦しい家に住んでいるのだから、婚約の茶を贈って貰っても飾る場所もないよ。衣裳や首飾りも徐々にその時その時に作れば良いので、一度にはいらないでしょ。ただ、あの人には…)

《兒女英雄傳》では“窄巴巴”と作る。

只見窄巴巴的三間小屋子，掀起裡間簾子進去，…。(《兒女》12.2b.1)

(狭い三間の小部屋があり、奥の簾を上げて入って行きますと、…)

湿漣漣　shīdādā

釈義：「〔形〕びっしょり濡れたさま、じっとり湿ったさま」。現代共通語では一般に“湿淥淥”。

《现汉》、《古今》、《补》に未収。《漢語》に同音語“湿答答”を“濕極之貌，亦作濕漣漣”で収録。

方言辞典類では《山东》、《河北方言》、《现代北京》に未収。

《忻州方言俗语大词典》に同音語“湿塌塌”を釈義“①形容衣物透湿。②形容田地里很湿”とするから山西省でも用いられていることがわかる。

《汉方大》(p.6285)に“湿泫泫”(釈義〔形容詞〕“湿淋淋”<ぐっしょり濡れているさま>)の方言点を冀魯官話(山東省)とする。近似音語“湿沱沱”(釈義〔形容詞〕“湿淋淋”)の方言点を西南官話(河北省武漢)とする。

《現漢方大》(p.5971)に“湿漣漣”は未収。

近世語辞典類では《例释》に“湿泫泫”(釈義“湿淥淥”「びっしょり濡れたさま」)を《醒》第四回より挙例。《百部小说》にも収録。

《方言俗语》、《古方言》、《石頭記》、《近代汉语后缀形容词词典》に未収。

《醒》の例。

珍哥依方吃了。將有半頓飯時，覺得下面濕漣漣的，摸了一把，弄了一手紫的血。(4.13b.4)

(珍哥は処方箋通り服用しました。ご飯を半分程食べる時間が経ちますと、下の方がじっとり湿って来ました。そっとなでますと黒紫の血が手全体についています)

《金瓶梅詞話》からの例。

西門慶…道：“…。“怎的夜夜乾卜卜的，今晚裡面有些濕答答的。…。(《金瓶》53.7a.2)

(西門慶は…「…。毎晩いつも乾いてやがるのに、どうしたことか今夜はぐっしょり濡れてやがる。…。」と言った)

《兒女英雄傳》では“溼漉漉”(釈義“很湿”)と作る。

一方、“湿搭搭”は南方語系である。釈義も“形容有点儿湿”で、やや異なる。《吴》に“湿搭搭”(釈義“形容有点儿湿”)を評弾《孟丽君・洞房刺奸》より挙例。また、同音語“湿渻渻”、“湿嗒嗒”とも作る。釈義がいずれも「少し湿る」で、湿る程度は低い。ところで、“湿漉漉”は釈義“很湿的样子”を示し、湿る程度は高い。《吳下方言考》：“吴中谓物大湿者曰湿漉漉”を引用する。

《汉方常》に同音語“湿嗒嗒”(釈義“形容有点儿湿”)を呉方言とし、越劇《凉亭会》、《故事会》1982.4より挙例。

《汉方大》(p.6285)に“湿渻渻”(釈義“有点儿湿”)の方言点を呉語(浙江省杭州、余姚、绍兴、定海、上

海）とし、《定海県志》“潜，音答”を引用。“湿搭搭”“湿嗒嗒”“湿答答”とも作るとする。

紅馥馥　hóngfùfù

釈義：「〔形〕赤いさま」。褒義である。現代共通語では一般に“红扑扑”。

《现汉》、《古今》、《漢語》、《补》に未収。《拼音词汇》に未収。

方言辞典類では《山东》に同音語“红肤肤”（釈義“略呈红色”）として立項。《汉方常》、《现代北京》、《河北方言》に未収。

《汉方大》（p.2357）に同音語“红拂拂”（釈義“脸色红润的样子”）で方言点を冀魯官話（山東省淄博）、晋語（山西省忻州）とする。

《現漢方大》（p.2980）に“紅馥馥”は未収。

近世語辞典類では《例释》に“紅馥馥”（釈義“红。含有褒义。馥馥，词尾”）を《真本金瓶梅》、《醒》第五十八回より挙例。“红拂拂”とも作るとする。《百部小说》にも収録。《金瓶梅词典》に釈義“红润有香气”とする。

《方言俗语》、《古方言》、《石頭記》、《兒女英雄傳》に未収。

《醒》の例。

直待了晌午大轉，相棟宇喫的臉紅馥馥的從外來了；見了老狄婆子，…。（58.2a.9）

（お昼を大きく過ぎて相棟宇が酒を飲んで赤い顔をしながら外からやって来ました。狄奥さんに会い、…）

三日以後，沿邊漸漸的生出新肉，紅馥馥的就如石榴子兒一般。（67.10a.5）

（三日後、周囲に徐々に新しい肉ができた。それは赤くてザクロのようでした）

《金瓶梅詞話》からの例。

一碟香噴噴的橘醬、一碟红馥馥的糟荀、四大碗下飯，…。（《金瓶》45.3a.9）

（香りぷんぷんと良いミカンの味噌漬け一皿、赤いタケノコの粕漬け一皿。大皿の料理四碗、…。）

扁呼呼　biǎnhūhū

釈義：「[形]平たくてうすい。現代共通語では一般に“很扁”。

《现汉》、《古今》、《漢語》、《补》に未収。《拼音词汇》にも未収。

方言辞典類では《汉方常》、《山东》、《现代北京》、《河北方言》、《現漢方大》（p.2934）に“扁呼呼”は未収。

《汉方大》（p.4492）に“扁呼呼”（釈義“扁扁（贬）”）の方言点を冀魯官話（山東省）とする。

近世語辞典類では《例释》に“扁呼呼”（釈義“扁扁。含有贬义。呼呼，词尾”）で《醒》第八十四回より挙例。《百部小说》にも収録。《方言俗语》、《古方言》、《金瓶梅詞話》、《石頭記》、《兒女英雄傳》に未収。

《醒》の例。

其妻焌黑的頭髮，白胖的俊臉，只是一雙扁呼呼的大腳；娘家姓羅，…。（84.4a.4）

（その妻は、真っ黒な頭髪、白くふっくらした美しい顔ですが、ただ、二本の平たい大きな足でした。実家は羅と申しまして、…。）

忙劫劫 mángjiéjié

釈義：「〔形〕慌ただしい、あたふたするさま」。現代共通語では一般に“忙忙碌碌；急急忙忙”。

《现汉》、《古今》、《漢語》、《补》に未収。《拼音词汇》に未収。

方言辞典類では《汉方常》、《山东》、《现代北京》、《河北方言》、《現漢方大》（p.1551）に“忙劫劫”は未収。

《汉方大》（p.2183）に釈義“忙忙碌碌”の方言点を冀魯官話（山東省）とし、《醒》第二十四回より挙例。

近世語辞典類では《例释》に釈義“忙忙碌碌”で《醒》第二十四回より挙例。《古方言》、《百部小说》にも釈義“忙忙碌碌；急急忙忙”で収録。《方言俗语》、《金瓶梅詞話》、《石頭記》、《兒女英雄傳》に未収。

《醒》の例。

晁老道：“那做秀才時候，有那舉業牽纏，倒可以過得日子；後來做了官，忙劫劫的，日子越發容易得過，…。”（18.8b.4）

（晁老は「秀才の時は科挙の試験に合格するための勉強があったから、その為に却ってうまく日々を過ごすことができた。役人になってからは慌ただしくなり、いよいよ簡単に日々を過ごせたよ。…。」と言った）

張茂實道：“…。你就要還我，遲十朝半月何妨。爲甚麽這們忙劫劫還不及的。”（66.2a.5）

（張茂実は「…。君がボクに返そうというなら十日半月くらい遅れてもいいよ。なぜそんなに慌てるのかい？」と言った）

《金瓶梅詞話》では“忙匆匆（的）”を、《石頭記》、《兒女英雄傳》では“忙碌碌的”の同義語を用いる。

烟扛扛 yānkángkáng

釈義：「〔形〕煙霧が立ち上がるさま、煙霧が多くはっきり見えないさま」。現代共通語では一般に“烟腾腾”。

《现汉》、《古今》、《漢語》、《补》に未収。《拼音词汇》に未収。

方言辞典類では《现代北京》に“烟气杠杠”[yānqi gànggàng]を釈義“烟雾弥漫的样子”とする。

《汉方常》、《山东》、《河北方言》、《現漢方大》（p.4977）に未収。

《汉方大》（p.5071）に“烟扛扛”（釈義“烟腾腾”）の方言点を冀魯官話（山東省淄博）とする。

近世語辞典類では《例释》に“烟扛扛”（釈義“烟腾腾”）で《醒》第七十二回より挙例。《百部小说》、《古方言》（釈義“烟尘腾腾”）にも収録。

《方言俗语》、《近代语后语形容词词典》、《金瓶梅詞話》、《石頭記》、《兒女英雄傳》に未収。

《醒》の例。黄肅秋注に“烟扛扛的”を釈義“烟熏火燎、烟气烘烘的”とする。

這家狄也不消要他的，值幾个錢的東西。燒了烟扛扛的，叫人大驚小怪。（72.6b.3）

（これらのものも欲しくない。いくらの値打ちにもならない代物さ。焼いてしまって煙がもくもくとたちこめたら皆を驚かせてしまうしね）

大拉拉 dàlālā（大落落；大刺刺；大喇喇）

釈義：「平気である、気にかけない、悠然としたさま」。現代共通語では一般に“满不在乎；大模大样”。

《现汉》に未収（“大咧咧；大刺刺；大喇喇”と作るのも未収）。《补》に“大刺刺（的）”（釈義“大模大样；

大咧咧”）と作り方言語彙とする。一方、《古今》も“大剌剌”と作るが、近世語語彙とする。《漢語》は二種挙げる。即ち、“大剌剌”[dàlālā]を《水滸傳》より挙例。また“大落落”[dàluòluò]を《醒》より挙例。共に一般語語彙とする。

方言辞典類では《汉方常》に“大拉拉”（北方方言《醒》より挙例）、“大剌剌”（北方方言、《水浒传》より挙例）、“大喇喇”（北方方言、《聊斎俚曲集》より挙例）の三者を釈義“形容满不在乎的样子”で収録。これらは同音同義の異体字である。《山东》は“大喇喇”で、《河北方言》は“大咧咧”[daliēliē]で、《关中方言》は“大剌剌”で収める。《北京话》、《北京方言》、《现代北京》に未収。

《汉方大》（p.272）に“大拉拉”（釈義“大模大样；满不在乎（贬）”）の方言点を冀魯官話（山東省）とする。また、同書（p.276）に“大剌剌”（釈義“大模大样；大大咧咧”）の方言点を単なる官話、閩語（広東省汕頭）とする。同音語“大喇喇”（釈義“言行粗鲁；无拘无束”）の方言点を冀魯官話（山東省）、閩語（広東省汕頭）とする。

《現漢方大》（p.250）に“大拉拉”、“大剌剌”は未収。なお、“大拉拉”は釈義を“形容说话、辦事口氣很大”で方言点を于都とする。

《金瓶梅词典》に“大剌剌”（釈義“大模大样满不在乎的神态”）を収録。

《石頭記》、《兒女英雄傳》に未収。

《醒》の例。

晁大舍道：“是真个麽。大晌午，什麽和尚道士敢打這裡大拉拉的出去。”（8.12b.9）

（晁大舍は「本当かい？真っ昼間、どこぞの和尚、道士がここから平然と出て行く？」と言った）

“大拉拉”は“大落落”とも作る。

等珍哥走到跟前，往灵前行过了礼，孔舉人娘子大落落待謝不謝的謝了一謝，也只得勉強讓坐吃茶。（11.2a.8）

（珍哥が近くへ来て、霊前に向かって礼をしました。孔挙人の夫人は愛想なく礼かどうかわからない位の礼を行い、仕方なく〈心の中では嫌々ながら〉座を勧め、茶を出しました）

又指望邢皋門不知怎樣的奉承，那知他又大落落的，全沒些秋保。（16.7a.7）

（邢皋門がどのようにお世辞を言ってくれるかしらと望んでいたが、逆に彼はそっけなく、全く眼中にありませんでした）

窮拉拉　qiónglālā

釈義：「〔形〕とても貧しい、ひどく貧乏なさま」。現代共通語では一般に“很穷”。

《现汉》、《古今》、《补》に未収。《漢語》に“窮拉拉”を釈義“貧寒貌”で一般語語彙として収録、《醒》からの用例を挙げる。《拼音词汇》に未収。

方言辞典類では《汉方常》、《山东》、《现代北京》、《現漢方大》（p.5575）に未収。

《汉方大》（p.2937）に“穷拉拉”（釈義“很穷”）の方言点を単に官話とする。

近世語辞典類では《例释》に“穷拉拉”（釈義“很穷，拉拉，词尾”）を《醒》第九回より挙例。《百部小说》にも収録。

《方言俗语》、《古方言》、《金瓶梅詞話》、《石頭記》、《兒女英雄傳》に未収。

《醒》の例。黄肅秋注に釈義“穷哈哈、穷光光的。拉拉，语尾辞”とする。

計氏道："…。我不快着做了衣裳帶回家去，你爺兒兩個窮拉拉的，當了我的使了，我只好告丁官兒罷了。…。(9.2b.9)

（計氏は「…。私は早く着物をこしらえて家へ持って帰ります。お父さんら二人ともとても貧しいでしょうが、私のものを質に入れて使ったら私は裁判に訴えて出ますよ！…。」と申します）

烏樓樓　wūlóulóu

釈義：「〔形〕〈目が〉くるくる動くさま、きょろきょろするさま」。現代共通語では一般に"眼睛转动很快"。

《现汉》、《古今》、《漢語》に未収。但し、《古今》に"乌溜溜"（釈義"形容眼睛黑亮而灵活"）で収録。《拼音词汇》に未収。

方言辞典類では《汉方常》、《山东》、《现代北京》、《河北方言》に未収。

《汉方大》(p.770) に"烏樓樓"（釈義"即乌溜溜。眼睛转动很快"）の方言点を冀魯官話（山東省）とする。

《現漢方大》(p.3282) に"烏樓樓"は未収。但し、"乌溜溜"（釈義"形容眼睛大且黑亮有神"）とするが、釈義がやや異なる。

近世語辞典類では《例释》に"烏樓樓"（釈義"这里形容眼睛转动很快"）で《醒》第二十一回より挙例。この按語に"今方言中还说'乌溜乌溜'"とする。

《百部小说》、《方言俗语》、《古方言》、《金瓶梅詞話》、《石頭記》、《兒女英雄傳》に未収。

《醒》の例。

晁夫人一隻手拿着他兩條腿替他擦把把，他烏樓樓的睜着眼，東一眼西一眼的看人，炤着晁夫人的臉合鼻子，碧清的一泡尿雌將上去，笑的一个家不知怎麽樣的。(21.9a.7)

（晁夫人は片方の手でその子の二本の足を持ってウンコを拭いてあげた。その子は目を見開きキョロキョロさせて周囲の人を見つつ、晁夫人の顔や鼻をめがけて綺麗な碧色のおしっこを飛ばした。一家全員笑ってどうしたらよいか分からない）

實拍拍　shípāipāi

釈義：「〔形〕固い、堅い」。現代共通語では一般に"坚硬；僵硬；不松软"。

《现汉》、《古今》、《补》ともに未収。《漢語》に釈義"堅硬充實之狀"、一般語語彙として収録。この点でも《漢語》は近世語資料より語彙を多く採用したことが分かる。

方言辞典類では《汉方常》に"实拍拍"（釈義"结结实实（多含贬义）"）を山東方言として《醒》より挙例。《山东》に単なる"拍拍的"（釈義"形容多（多用于物）"）の省内方言点を曲阜とする。但し、"形容词+拍拍的"（=ABB重畳型）ではなく、そこで挙げる例"集上的东西～"の如く、単に"拍拍的"のみで使用される。

《北京话》、《现代北京》、《河北方言》、《吴》に未収。

《汉方大》(p.3692) に"实拍拍"（釈義"僵硬；不松软"）で方言点を冀魯官話（山東省淄博）とする。

《現漢方大》(p.5294) に"實拍拍"は釈義（"一定"。方言点は洛陽）が異なる。

元曲等に見える"实拍拍"は必ずしも貶義ではない。例えば《古方言》は"实拍"の項で同義語"实丕丕"[shípīpī]（元・王实甫《韩彩云丝芙蓉亭》より挙例）、"实呸呸"[shípēipēi]（元・王仲文《救孝子》より挙例）ともに"实拍拍"を収める。《元语言词典》は無名氏［柳营曲］より"实丕丕"、《救孝子》より"实呸呸"を、《近

汉》は元・李好古《张生煮海》三折、明・屠隆《修文记》二六出より“实丕丕”を挙例するが、釈義はいずれも「確実な、確かな、しっかりしている、ゆるがない、充実している」となり、貶義ではない。

《例释》は釈義“结结实实”で貶義を含み、“拍拍”を接尾辞だと明言、《醒》第五十八回より挙例。

《方言俗语》、《近代汉语后缀形容词词典》、《金瓶梅詞話》、《石頭記》、《兒女英雄傳》に未収。

《醒》の“實拍拍”は貶義である。その例。

都說是幾年的新活洛，通不似往年的肉鬆，甜淡好喫，新到的就苦咸，肉就實拍拍的，通不象似新魚。(58.3a.2)

(何年ものかの新しい活洛魚だと皆申します。昔のように肉がもろいのではありません。甘くてうす味でおいしいのです。新しく到着したのは苦く、塩辛く、肉は固く、全く新しい魚のようではありません)

死拍拍 sǐpāipāi

釈義:「〔形〕活気がない、生気がない、すっかり死んでいる、融通性がない」。現代共通語では一般に“死板;不灵活;死死;一定”。

《现汉》、《古今》、《漢語》に未収。《拼音词汇》に未収。

方言辞典類では《汉方常》、《山东》、《现代北京》、《河北方言》に未収。

《汉方大》(p.1798)に“死拍拍”(釈義“死死;一定。拍拍，词尾”)の方言点を冀魯官話(山東省)とし、《醒》第四十九回より挙例。

《現漢方大》(p.1321)に“死拍拍”は未収。

近世語辞典類では《例释》に“死拍拍”(釈義“死死。含有貶义。拍拍，词尾)を《醒》第四十九回、十三回より挙例。また、同義語“死丕丕”を《蒲松齡集》より挙例。この按語に“今方言中说‘死扑扑’”とする。

《百部小说》、《古方言》にも収録。

《方言俗语》、《金瓶梅詞話》、《石頭記》、《兒女英雄傳》に未収。

《醒》の例。貶義である。

李成名娘子道:“你看麼。那死拍拍的個銀人，中做甚麼。這人可是活寶哩。”(19.6a.1)

(李成名のかみさんは「何を言うの!そんな融通性がない死んだような銀人間なんて何になるの?こちらは活きた宝物よ!」と言います)

平撲撲 píngpūpū

釈義:「〔形〕平らである」。現代共通語では一般に“平”。

《现汉》、《古今》、《漢語》、《补》いずれにも未収。《拼音词汇》に未収。

方言辞典類では《汉方常》、《山东》、《现代北京》、《现汉方大》(p.907)に“平撲撲”は未収。

《汉方大》(p.1189)に釈義“平(褒义)”の方言点を単なる官語とする。

近世語辞典類では《例释》に釈義“平。含有褒义。扑扑，词尾”で《醒》第六十四回より挙例。《百部小说》に釈義“很平常”で収録。

《方言俗语》、《古方言》、《近代汉语后缀形容词词典》、《金瓶梅詞話》、《石頭記》、《兒女英雄傳》に未収。

《醒》の例。

這白姑子串百家門見得多，知得廣，單單的拿起一錠黑的來看，平撲撲黑的面子，死紂紂沒个蜂眼的底兒。(64.9b.3)

（この白尼は様々な家を訪問し、見聞も広く世間を知っている。ただ単に黒い一錠を持ち上げて見ると，平らで真っ黒なオモテ面、蜂の目の紋様がない裏面でした）

綠威威　lǜwēiwēi

釈義：「〔形〕微かに緑色を出している」。現代共通語では一般に“微微发绿”。

《现汉》、《古今》、《漢語》、《补》に未収。

方言辞典類では《汉方常》、《山东》、《現代北京》、《河北方言》《現漢方大》(p.5330) に“綠威威”は未収。

《汉方大》(p.5870) に“綠威威”（釈義“微微发绿（褒）”）の方言点を冀魯官話（山東省淄博）とする。

近世語辞典類では《例释》に“绿威威”（釈義“微微发绿。含有褒义。微微，词尾”）で《醒》第二十八回より挙例。《百部小说》にも収録。

《古方言》、《方言俗语》、《金瓶梅詞話》、《石頭記》、《兒女英雄傳》に未収。

《醒》の例。

合夥砌了池塘，夏秋積上雨水，冬裏掃上雪，開春化了凍，發得那水綠威威的濃濁，頭口也在裏面飲水，人也在那裏邊汲用。(28.8a.3)

（仲間で小さな池を掘り築き、夏秋に雨水を溜め、冬に雪を掃き集め、春に溶かします。それは緑色の濃い濁水です。家畜もそれを飲み、人も汲んで用います）

藍鬱鬱　lányùyù

釈義：「〔形〕青々とした（かぐわしい）さま」。現代共通語では一般に“蓝蓝”。

《现汉》、《古今》、《漢語》、《补》に未収。《拼音词汇》に未収。

方言辞典類では《汉方常》、《山东》、《現代北京》、《河北方言》、《現漢方大》(p.5865) に未収。

《汉方大》(p.6422) に“蓝郁郁”（釈義“蓝（褒）”）の方言点を冀魯官話（山東省）とする。

近世語辞典類では《例释》に“蓝郁郁”を釈義“蓝蓝。含有褒义。郁郁，词尾”で《醒》第二十一回より挙例。《百部小说》にも収録。

《方言俗语》、《古方言》、《金瓶梅詞話》、《石頭記》、《兒女英雄傳》に未収。

《醒》の例。

紅馥馥的腮頰，蓝鬱鬱的頭皮。兩眼秋水爲神，徧體春山作骨。(21.12b.10)（“徧體”＝“遍體”）

（赤々としたかぐわしいほお、青々としたかんばしい頭皮。両目の秋水は神をなし、遍体は春山骨をなす）

なお、AABB式重畳型形容詞は軽声語の中の「重畳型複合形容詞」を参照。